

吉川幸次郎著「『論語』の話」ちくま学芸文庫、筑摩書房 2008年1月10日刊を読む

## 学問のすすめ

1. 人類の教師の中で、孔子よりもより崇高な感じをもつ教師はほかにあると思います。しかしわれわれの日常の生活にたいへん密接な感じのする人類の教師、それはやはり孔子であり、またそうした感じの書物は、彼の言行をしるしました「論語」であるように私には思われます。それはこの前申しましたように、孔子がたいへん熟慮的な人物であったからであります。人間の希望を知るとともに人間の限定を知って、限定を知った上で人間の希望に向かって進むべきことを穏やかに説く教師だからであります。
2. ところで、そうした孔子の立場の上から生まれますたいへん一つの重要な事柄、それは学問の重視ということであります。孔子によりますと、素朴なひたむきな誠実、それはむろん人間にとって必要なものでありますけれども、それだけでは完全な人間にはなれない、必ず学問をしなければならない、学問をすることによって人間は初めて人間になる。人間の任務は<仁>すなわち愛情の拡充にあります。そうして人間はみなその可能性をもっている、しかしそれはただ素朴にそう考えるだけではいけないのでありまして、学問の鍛錬によってこそ完成される、いいかえれば愛情は盲目であってはならない。人間は愛情の動物である、その拡充が人間の使命である、また法則であるには違いありませんが、愛情の動物であり、その拡充が人間の使命であり、また法則であるということを確認して把握いたしますためには、まず人間の事実について多くのことを知らなければならない、その方法は学問にある。と申しまして、孔子のころには自然科学はまだ学問の重要な部分ではなかったであります。天文学についてだけは多少の知識をもっていたと思いますが、それ以外については古代のことありますから、なお無知であったであります。孔子が学問として意識いたしますものは過去の人間の経験であります。それを記載した書物をよく読むということが、孔子の学であります。
3. 孔子が<学>をいかに重視いたしましたかは、「論語」をあけますとその第一の章が、<子曰く、<sup>こ</sup>学んで時に<sup>ま</sup>之れを<sup>よ</sup>習う、亦た<sup>よ</sup>説<sup>こ</sup>ばしからずや>。「子曰」その次の字がすぐ<学>であることによっても示されております。孔子はしばしば自分についても、自分は他の人人と違った点がある、私ほどの誠実さをもった人間はほかにもいようが、私ほど学問の好きな者はおるまい、そこが私と他の人の違うところであるということを申しております。これは有名なことばであります、<子曰く、十室の邑>十軒ほどの小さな村でも、<必ず忠信<sup>きゆう</sup>丘<sup>こと</sup>の如き者有らん>誠実さは私のような人間がきつといるだろう、しかしながら<丘の学を好むに如かざるなり>私ほど学問好きではあるまいといっておりますのは、学問の価値を認めることにおいて、おそらく当時の他の学派とその立場が違うことを語ったものであります。

- 4 . 自分自身についていいましたことばは、ほかにもいろいろ見えるのでありまして、こうもいっております。<子曰わく、我れは生まれながらにして之れを知る者に非ざるなり>私は天才ではない、生まれながらにして知る者ではない、<古<sup>いにしえ</sup>を好み、敏<sup>びん</sup>以って之れを求むる者なり>過去の事柄をいろいろと研究することを好んで、その中から敏感に人間の道を求めてゆく者である。
- 5 . あるいはまた<述べて作らず>私はただ祖述するだけで、何も創作をするわけではない、<信じて古を好む>古代的な事柄、その中に真実があるということを信じて、それを好むものである。
- 6 .あるいはまた<蓋<sup>けだ</sup>し知らずして之れを作<sup>な</sup>す者有り>十分な知識をもたずに行動を起こす者がある、そういう人間も世の中にはいる、しかし、<我れは是れ無きなり>私にはそういう点はないのだ、そうもいっております。
- 7 . さらにまた強いことばといたしまして、本を読んでの学問、それとただの思索、純粹に思弁的な思索、その二つの価値を比べまして、こうもいっております。<子曰わく、吾<sup>わ</sup>れ嘗<sup>か</sup>つて終日食らわず>一日じゅう、ものも食はず、<終夜<sup>い</sup>寝ねず>夜通し寝ずに、<以って思う>そうして思索した、しかし<益無し>その結果はあまり利益があると思わなかった、<学ぶに如かざるなり>本を読むことには及ばなかった。そうもいっております。ほかの書物ではそれがもっと誇張された、強いことばになりまして、<吾れ嘗つて終日にして思いぬ、須臾<sup>しゅゆ</sup>の学ぶ所に如かざるなり>。ちょっとの間でも本を読むのに及ばない、そういうことばにもなっておりますが、読書と思索ということについての孔子の態度はそのようでありました。
- 8 . もっとも一方では、<学びて思わざれば<sup>すなわ</sup> 則<sup>くら</sup>ち罔し>ただ本を読むだけで思索を伴わない読書というものはでたらめになる、そうもいっております。読書というものは、思索の前提としての読書でなければならない、<学びて思わざれば則ち<sup>あやう</sup>罔し>そうもいっておりますが、そこにはそれに続けて<思うて学ばざれば則ち<sup>あやう</sup>罔し>思索をするだけで読書をしなければ、それは危険である、主観的な危険な方向へ走ってしまう、大体そのような方向のことばであります、そういうふうにも丁寧に戒めております。
- 9 . こうした学問の尊重ということは、もう一つの政治の尊重、人間が愛情を相互に働かせますには、よき政治が必要であるという形での政治の尊重、そのことと相並んで孔子の学説の中で最も重要なものと思われまゝ。政治の尊重のほうにつきましては、私は政治のことはよくわかりませんので、十分に理解することができませんけれども、学問の尊重のほうについては、私は完全に孔子の教えに従いたいと思っております。
- 10 . さらにまた、孔子が申します学問、その内容はどのようなものであったかと申しますと、文学についての勉強を含んでいるということは、これまたたいへん重要なことでもあります。少し歴史的に申しますと、中国の古代におきまして、文学というものは必ずしも普遍的に価値を認められるものではなかったように思います。孔子と対立する学派でありました墨<sup>ぼくし</sup>子の学派なんかでは、これは直接に文学を否定してはおりませんが、音楽というものを否定しております。音楽という

ものは無用な消費だといっておりますこと、いつか申した通りであります、それと関連して、墨子などは文学というものにあまり価値を認めなかったと思います。ところが、孔子は弟子たちに教えますに常に「詩経」を重視いたします。「論語」の中にも<唐棣の華、偏として其れ反れり、豈に爾を思わざらんや、室の是れ遠し>という恋歌をとりあげまして、それを政治なり学問なり道徳への人間の努力のたとえとしてではありますけれども、<未まだ思わざるのみ>それは思い詰めないからだ、<何の遠きことか之れ有らん>思い詰めさえすれば、恋人の家と同じく、人間の到達したい目標が、遠いなどということがどうしていえるかというふうに、比喩としてではありますけれども、常に「詩」つまり当時の文学であります歌謡を重視しております。それはおそらく単にそうした学問なり道徳なり政治の比喩として重視したばかりではないのでありましょう、文学というものには最も純粋な人間の感情があらわれているといえるということばもあります。<子曰わく、詩三百、一言以って之れを蔽えば、曰わく、思い邪無し>そこには不純粋な感情はないと、そういっております。

11. あるいはまた弟子たちにむかって、<小子何んぞ夫の詩を学ぶ莫きや>若者たちよ、なぜ詩の勉強をしないのか、<詩は以って興こす可く、以って観る可く、以って群す可く、以って怨む可し>詩というものはそれによっていろいろな興奮を得ることができる、またいろいろ世の中の状態を観察することができる、人間の連帯感を深める、普通の論理、普通の散文では到達することができない切迫した感情を得ることができる、そういうふうに文学の価値を認めている。おそらく中国において文学の価値をこんなに認めた最初の人、孔子であるといつて差つかえないであります。

12. また、これは書物を読むのとは少し別のこととなりますが、音楽に対しての敏感、尊重ということも、前に申し上げたとおりであります。人間の教養の順序といたしまして、<子曰わく、詩に興こり>教養の最初は文学にある、<礼に立つ>その骨格をつくるものは社会生活の法則を知ることである、その次にことばを継ぎまして<楽に成る>その完成は音楽においてこそあるとさえもいっております。

13. ところで、このような点で孔子の指さします方向は、これは一つの文化主義であるといえることができます。ですから、往往にして誤解されますように、偏狭な教条的な倫理の書物、偏狭な道徳の書物、そういうふうに理解するのは、この書物の見方として正しいものと思えないのであります。少なくとも完全な見方とは思えません。道徳を教えるとともに「論語」の特質としてありますのは、その詩としての、文学としての性質であります。私は文学的言語というものは、単に論理の世界の中のことだけをいうだけでなしに、論理の世界を越えまして、論理では追跡し得ない無限定な世界、それへの消息を伝えるものが文学であると考えておりますが、「論語」はそういう性質をもっております。それは倫理の書物、道徳の書物でないことはありません。むしろそうであります。しかしながら、たとえば<子、川の上<sup>ほとり</sup>に在りて曰わく、逝く者は斯くの如し、昼夜を舍<sup>お</sup>かず>ということば、これは人間の進歩をいうことばである、あるいはまた人間の生活に必然的に起こる推移を悲観的にいうことばである、いややはりそうではない、楽観のことばであると、いろいろ説は分かれておりますが、そうした説を越えまして、つまり論理で追跡し得る

範囲を越えまして、<逝く者は斯くの如し>ということばは、論理では追跡し得ない、しかも人間にとってたいへん重要なもの、それを示唆するように思います。「論語」はそのように詩として読まれ、文学として読まれる性質を、もっており、またそのように読むことが「論語」の正しい読み方、あるいは完全な読み方であると思います。

14. ところで、中国では、少なくとも中国の大陸では、ただいま文化大革命の激しい動きがございまして、従来は多くの人を読んでおりましたこの書物が、あるいはやはり旧文化の一つとして、しばらくは読まれなくなるかもしれません。「論語」が読まれなくなるという事実は、別に中国だけにあるのではないのでありまして、明治維新以来の日本もそうであったかもしれません。人間の歴史というものはいろいろ変化するものでありますから、いろいろな時期が起こるでありましょう。しかしながら「論語」という書物が少なくともわれわれのたいへん身近な生活についてよい教訓を与える、教訓というとまたかたくなりますが、単に教訓とはいえない示唆を与える書物であるという性質は、変わらないように思います。私などは大たい「論語」によって生活するといってもよい面をもっているのでありまして、これは孔子自身のことばではなしに、孔子の弟子の曾子、曾参のことばとして、「論語」の第一篇「学而」に見えることばがあります。

15. <吾れ日に三たび吾が身を省りみる>あるいは<三つのことについて吾が身を省りみる>三つの点で毎日自分自身を反省する。その三つはどのようなことであるかと申しますと、第一は<人の為に謀りて忠ならざるか>人から相談を受けて、相談に乗ってあげながら忠実に考えていないということはないか、人から頼まれたことを引き受けておきながら忠実に実行していないということはないか、<人の為に謀りて忠ならざるか>。それが第一であります。<朋友と交わりて信あらざるか>友だちとの交際で何か不誠実なことをしていないか、それが第二であります。第三については読み方が分かれるのでありますが、一つの読み方では、自分がよく理解していないことを人に語り伝えてはいないかという、そういう意味に読みます場合は<習わざるを伝うるか>であります。もう一つの読み方として、古典の勉強を怠っていないか、そういう意味に読みますときは、<伝習わざるか>と読みます。<習わざるを伝うるか>と<伝>の字を動詞に読みますか、あるいは<伝、習わざるか>と<伝>の字を名詞に読みますか、説が分かりますが、要するに勉強を怠ってあやふやなことを人さまにいつていやしないか、それが曾子が毎日反省する第三の点であります。私などは、毎日このことばを考えております。私は、もはや明治までの人のように、「論語」の全文を暗誦してはおりません。そのためにこのお話も、しばしばあやふやなことを申したと思います。<伝を習って>いないようであります。また理解があやふやであるために、十分に自信のないことをも、そうでないように申したようであります。<習わざるを伝うるか>でもあったようであります。また<人の為に謀りて忠ならざるか>このお話の依頼を受けて、しかもいいお話をしていないとすれば、<人の為に謀りて忠>でなかったわけであります。そうして聴取者の皆さんとの間がらとしては、<朋友と交わりて信>がなかったかもしれません。そういう反省をこのお話の終わりにも私にさせるほど、この「論語」という書物がたいへん私どもに身近な書物であるという性質は、歴史のいろいろな波を越えて変わらないと思います。

[コメント]

中国文学者として著名な吉川幸次郎先生の NHK ラジオを論語講座の速記録。人間性あふれる論語の内容が実にわかりやすく述べられたものと極めて高く評価したい。論語を学ぶ者としては実に有難い講演速記録だと思う。

- 2011 年 4 月 2 日 林 明夫記 -